



TITLE:

解隠題之法書き下し文 (大成算経 :  
小松校訂本, その1)

AUTHOR(S):

関, 孝和; 小松, 彦三郎

---

CITATION:

関, 孝和 ...[et al]. 解隠題之法書き下し文 (大成算経 : 小松校訂本, その1).  
数理解析研究所講究録 2013, 1858: 17-31

ISSUE DATE:

2013-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/195267>

RIGHT:

# 解隠題之法

## 書き下し文

小松彦三郎 關孝和 編  
校

「解隠題之法」の漢文校訂本は、小松彦三郎「關孝和著『三部抄』山路主住本の復元」、数理解析研究所講究録一四四四「数学史の研究」(二〇〇五年七月)、一九三―二〇一頁に記載。

# 隱題を解く法

凡<sup>すべ</sup>て五篇

関孝和編

## 立元第一

立元は、天元の一を立つるなり。

太極



## 加減第二 併を附す

加は、単位なるは加と謂<sup>い</sup>い、衆位なるは併と謂<sup>う</sup>う。おのおのもし各其異名ならば相減じ、もし則、同名ならば相加う。正無人はこれを正とし、負無人はこれを負とす。

仮如、たとえば

左	右				
<table><tr><td>一</td></tr><tr><td>ト</td></tr></table>	一	ト	<table><tr><td>一</td></tr><tr><td>二</td></tr></table>	一	二
一					
ト					
一					
二					

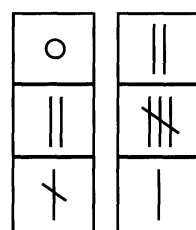
これを加う。右左一級の数は同名なれば相加えて、正二。二級の数は異名なれば相減じて、正一。

仮如、  
たとえ

これを加う。

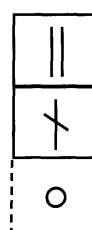
右左一級の数は正無人故に正二。二級の数は異名相減じて負一。三級の数は異名相減じて空。

左 右



を得。

を得。

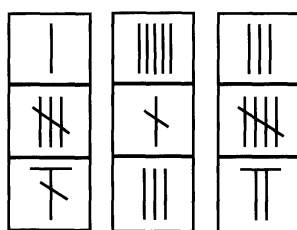


仮如、  
たとえ

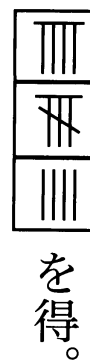
これを併あわす。

右中左一級の数は同名相減じて正九。右中左二級の数は同名相減じて負八。右中三級の数は同名相減じて正四。

左 中 右

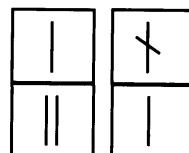


減は、其<sup>それ</sup>、同名なるは相減じ、則<sup>よつて</sup>、異名なるは相加う。正無人はこれを負とし、負無人はこれを正とす。



仮如、

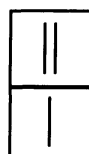
左 右



右を以つて左を減ず。

これを減ず。

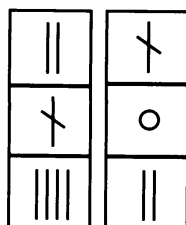
右左一級の数は異名相加えて正二。二級の数は同名相減じて正一。



を得。

仮如、

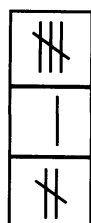
左 右



左を以つて右を減ず。

これを減ず。

右左一級の数は異名相加えて負三。二級の数は負無人故に正一。三級の数は同名相減じて負二。



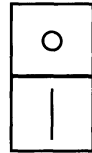
を得。

### 相乗第三 見乗を附す

相乗ずるは、その式を左右に置き、左を以つて上級<sup>よ</sup>自り下級<sup>ま</sup>到で逐つて右に遍乗す。同名の相乗は正と為し、異名の相乗は負と為す。<sup>おのおの</sup>各相併せて式を得。自乗はこれに準ず。

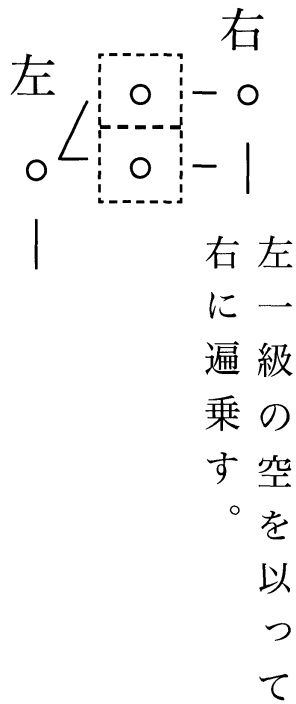
見乗は、その式の乗数を置き、もし帰除ならば空、平方ならば一、立方ならば二、以上これに倣う。自乗はこれを倍し、一を加う。再乗はこれを三たびし、二を加う。三乗はこれを四たびし、三を加え、<sup>次第これに倣い、</sup>乗数と為す。相乗ずるは両式の乗数を相併わせ、一を加え乗数と為す。

仮如、

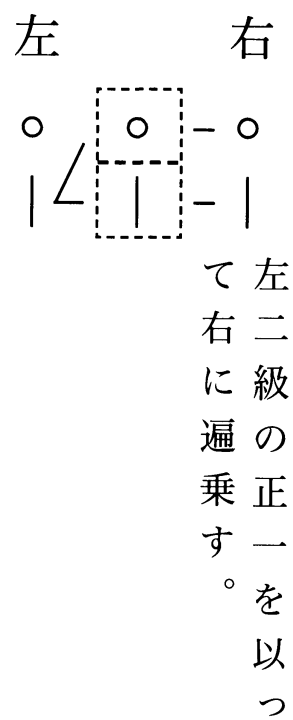


これを自乗す。

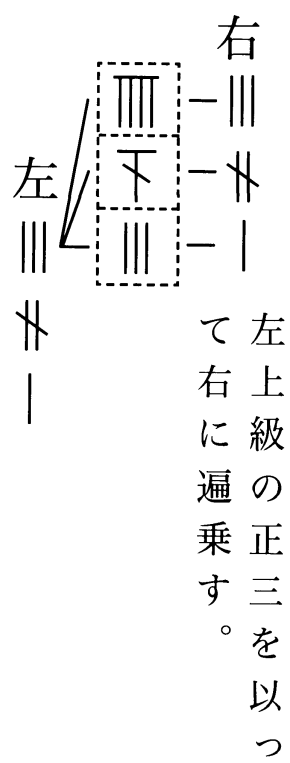
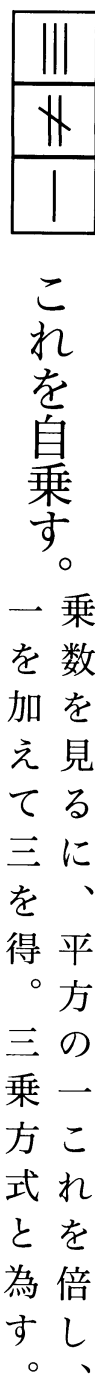
乗数を見るに、帰除の空に一を加え、一を得。平方式と為す。



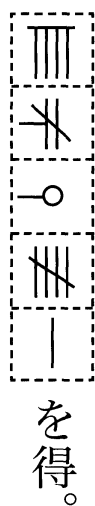
二位相併せて



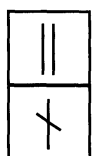
仮如、



三位相併せて、



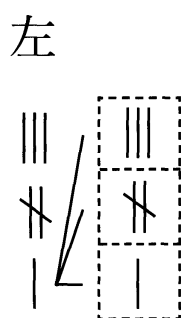
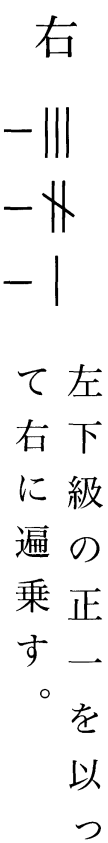
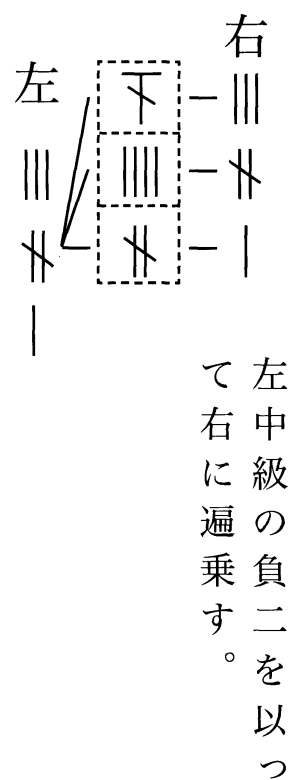
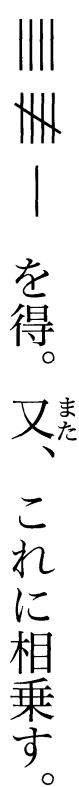
仮如、



これを再自乗す。

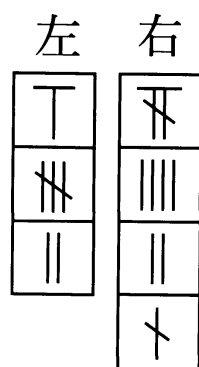
乗数を見るに、  
加えて二を得。  
帰除の空に二を  
立方式と為す。

先ず、これを自乗し、





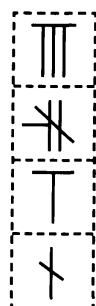
仮如、



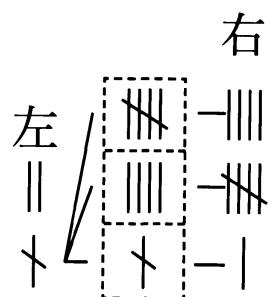
これを相乗ず。

乗数を見るに、平方の一、立方の二を相併せ、一を加えて、四を得。四乗方式と為す。

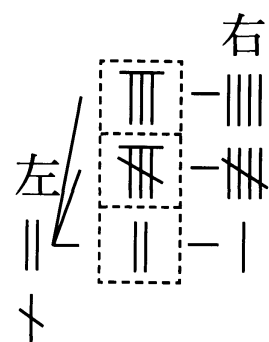
二位相併せて、



を得。



左下級の負一を以つて右に遍乗す。

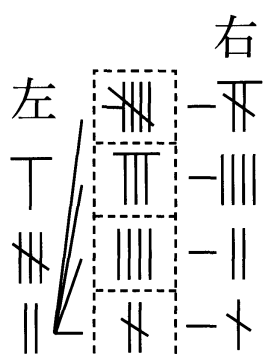


左上級の正二を以つて右に遍乗す。

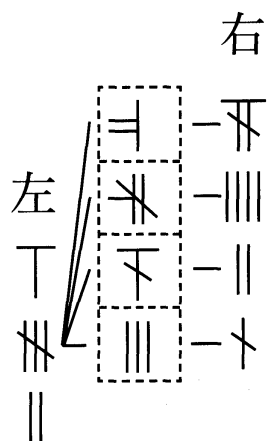
三位相併せて、



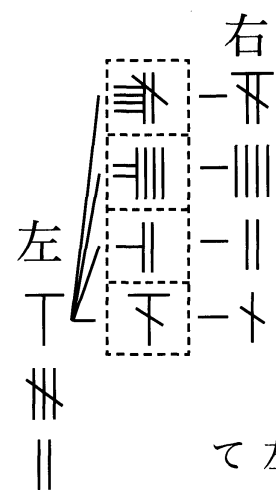
を得。



左下級の正二を以つて右に遍乗す。



左中級の負三を以つて右に遍乗す。



左上級の六を以つて右に遍乗す。

## 相消第四

相消は意の如くこれを求め、得たる寄左数と相消数両数のうち意に任せて其同名それは相減じ、則異名は相加え、正無人はこれを負とし、負無人はこれを正として帰除及び開方式を得。

仮如、

得数



寄左

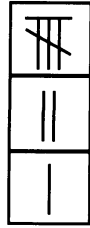


得数を以つて寄左を消す。

相消す。

一級の数に正無人故に負八。二級の数に正二。三級の数に正一。

開方式



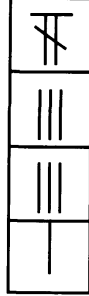
を得。

仮如、

得数



寄左

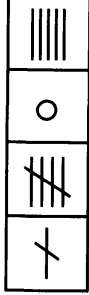


寄左を以つて得数を消す。

相消す。

一級の数に同名相減じて正五。二級の数に同名相減じて空。三級の数に異名相加えて負四。四級の数に正無人故に負一。

開方式



を得。

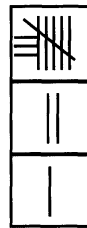
## 開方第五

得商を附す

開方は商を立て、隅よ従り 平方式は廉より これを命じ、もし位を超すも 実に到

る。ことごと咸く同加異減してこれを開き尽くす。諸級中、正負相反せば、これを翻法と謂うなり。

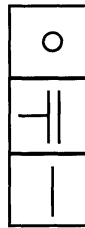
仮如、開方式



平方にこれを開く。商五を立て、廉に命じ、方に同加し、方正七を得。商五を以つてこれに命じ、実に異減して、あたかも尽く。又

商五を以つて廉に命じ、方に同加し、方正一十二を得。

商五



仮如、開方式



立方翻法にこれを開く。商三を立て、隅に命じ、廉に同加、廉負八を得。商三を以つてこれに命じ、方に異減し、方正反つて負一十を得。商

三を以つてこれに命じ、実に異減し、あたかも尽く。また商三を以つて隅に命じ、廉に同加して廉負一十一を得。商三を以つてこれに命じ、方に同加して方負四十三を得。また商三を以つて隅に命じ、廉に同加して廉負一十四を得。ここに方正は反りて負となる故に翻法と為す。

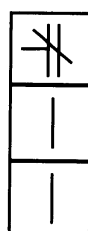
商三



## 得商

先ず、商一を立て、隅<sup>よ</sup>自りこれを命じて実<sup>ま</sup>に到り、異減同加して、実余<sup>すなわ</sup>らば、復た商一を立て、前の如く実<sup>ま</sup>に到る。逐<sup>かく</sup>つて此の如くして実<sup>ま</sup>尽くれば、則<sup>すなわ</sup>ち、立てたるところの商相併せて定商と為す。

仮如、



先ず、商一箇を立て、廉よりこれを命じ、実まで異減同加して

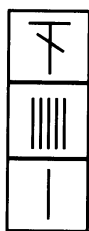
商一箇



を得。

復、商一箇を立て、前の如くして

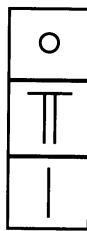
商一箇



を得。

又、商一箇を立て、前の如くして実<sup>ま</sup>尽く。

商一箇



仍<sup>よ</sup>つて、立てたる所の商を相併せ、三を得、定商と為す。

或は実翻えりて尽くる能<sup>あたわ</sup>わざれば、負商を立て、前の如く実に到り、異減同加して実尽くれば、則<sup>すなわ</sup>ち、前商相併せたる内<sup>うち</sup>負商を併せ減じたるを定商と為す。

仮如、

一	三
三	三
三	一
二	二

先ず、商一箇を立て、隅よりこれを命じ、実に到る。異減同加して

商一箇

三	三
三	三
三	三
二	二

を得。

又、商一箇を立て、前の如くして実翻えりて尽くる能わす。

商一箇

二	三
三	三
一	二
二	二

又、負商五分を立て、前の如く異減同加して、実尽く。

負商

分五

○	三
三	三
三	二
二	二

仍<sup>うち</sup>つて立てたる所の商相併せ、二箇を得、内<sup>うち</sup>負商五分を減じたる余り一箇五分を定商と為す。

或は實に不尽あらば、方を以つて、開商の位数に随い、實を除して、得る所を以つて、開きたる商に正負に依りて加減し、次商と為す。これを以つて隅より命じ、實に到りて、前の如く方を以つて實を除して得る所を以つて又次商を加減するなり。次第此の如くして定商を得。

仮如、


先ず、商一箇を立て、隅自りこれを命じて實に到り、異減同加して

商一箇

—○—

を得。

又、商二分を立て、前の如くして

商二分

—  —

を得。

又、商六釐を立て、前の如くして

## 商六釐


を得。

此の如く實に不尽ある故にここに於て方を以つて實を除し、正三毫四六強を得。前の開商に加入し、共に一箇二分六三四六強を得。次第此の如くして定商を得。

右に録する所の五篇は以つて隱題を解く所の法なり。各々深意これあり。いま捷徑を取り、これを誌す。学ぶ者は当に研究すべきのみ。

隱題を解く法訖る。

貞享乙丑八月戊申日龔て書く